２０１２年度　冬季研修会　報告　１

大阪府支援教育研究会

１月２６日、大阪国際交流センターで冬季研修会を行いました。午前・午後６つの講座すべて満席の参加となりました。参加された方みなさん熱心に受講され、これからの実践に役立てていこうとしておられました。講師の皆様から、子ども達の顔を思い浮かべながら明日の実践に生かしていけるお話をたくさん教えていただけた、との感謝の言葉が多くありました。有難うございました。

また、各支部から来られた役員の皆様、本当にお世話になりました。

各講座の内容報告をご覧下さい。すべての講座が定員を超過し、何人もの方にお断りをさせていただきました。申し訳ありませんでした。定員が少なすぎるなどのお叱りの声もいただきました。これからの研修の機会には、ぜひご参加ください。

なお、当日お書きいただいたアンケートの集約は、「報告２」にあります。

ユニバーサルデザインの授業づくり

閑喜　美史氏　　大阪府教育センター

ユニバーサルデザインは、対象を特定せず、誰でも自由に使え、効果を上げたり充足感が得られたりするものです。

閑喜氏は、それを支援教育の実践的課題として取り上げ、「個に応じた支援を可能にする学級・授業づくり」として、学習環境の整備、個の違いに対応できる授業、違いを認め合える集団づくりの３つの視点から、具体的に例を引きながら話されました。

まず、授業を受けるレディネスや教室環境の整備の大切さをおさえられた後、子どもの学力差・能力差に対応するためのオプションづくりを提示方法、表現方法、参加の方法の３つの面から、具体例を豊富に示しながらわかりやすく説明していただきました。次に、子どもが自ら選択しながら授業に主体的に向かうため前提となる学級集団、すなわち違いを認め合える学級集団づくりの要素と方向性を示されました。まさに、支援教育が、支援を必要とする子どものものだけではなく、そのスタンスがすべての子どもに必要であることを、実感できたお話でした。

障がいのある子どもへの性教育

ー子どもの性被害・性加害を防ぐためにー

徳永　桂子氏　　思春期保健相談士

障がいのある子どもへの性教育、副題として、子どもの性被害・性加害を防ぐために、とのテーマで、徳永桂子先生にお話いただきました。

性被害についての統計の中には、本人が話さないので障がいのある人たちの性被害は表れていないということを指摘されました。性被害を防ぐためには、ネットや性コミック本などの誤った知識ではなく、学校での正しい知識と行動としての性教育が大事であるという話をされました。その後、保護者に早期からの性教育の必要性の理解を得る「交通安全」と対比させた語りの実演や、参加者を子どもに見立てての授業実演もありました。

参加者からは、実際に授業をしていただきとても分かりやすかったという感想や、障がいのある子どもだけでなく関わるすべての子どもに通じる話で、性とは暗いものでふれてはいけないというイメージが変わりました、という言葉がありました。

当日は、多くの教材や書籍を展示していただき、研修会終了後も、多くの方が熱心に見ておられました。

障がい児に役立つ『ブレインジム』＆『ＢＲＭＴ』

武田　博子氏、橋本　美保氏　　キネシオロジーセンター

学校などでできる脳のエクササイズとして、ブレインジムの基本のエクササイズを紹介していただきました。

まず、脳の準備体操として　　①水をちびちび飲む

②ブレインボタン　　③クロスクロール　　④フックアップの４種類を行うことを教えていただきました。

そして、実際に水をゆっくり飲んで神経配線をよくし、ブレインボタン（お臍に手を当て、鎖骨の下をマッサージする）をして脳にスイッチを入れ、クロスクロール（左右交互に膝を上げ、左足の膝の上に右手をタッチ、右足の膝の上に左手をタッチ）で右脳左脳を動かし、フックアップ（手と足をクロスして深呼吸）で気持ちを落ち着かせる４つのエクササイズを体験しました。また、音読をするときに読みとばしてしまう子どもに効果があるエクササイズとして、レイジーエイトという手と共に目を動かす運動を教えていただきました。

後半は、原始反射についてお話をしていただきました。実際に体を動かしながら、時間ぎりぎりまでいろいろな子どもに有効なエクササイズをたくさん紹介していただき、大変充実した研修会になりました。

発達からみた子どもの理解と接し方

ー発達に凸凹のある子どもに有効な声かけなどー

山田　章氏　　寝屋川市教育委員会

山田先生から子どものタイプ別による支援を具体的にわかりやすくお話を伺いました。

１、 注意集中と抑制が弱いタイプ。

２、 聞いたことをまとめる力が弱いタイプ。

３、 見た情報をまとめる力が弱いタイプ。

タイプによってどんな支援が必要か。どう声かけをしたらいいか。勉強をどう教えたらいいか教えていただきました。先生方のやり方があるかもしれないが、学習方法を広げることで０点でではなく、６０点を取らせることが出来る。それによって自信をもつことができ、将来、ニートにならず社会に出て働くことができる。

最後に伺ったお話は、叱っては絶対いけない。特に、見てまとめるのが苦手なタイプはやってはいけない。叱っている先生の心情が理解できないし、強い者の前では言うことを聞くというだけになってしまう。代わりに、集団生活に困らないために「覚えててね作戦」を使う。それは、「しなさい」「ダメです」と、子どもを根本から変えようとするのではでなく「分かった？」「覚えてて」「言ってみて」と、子どもが独自にもつルールをクラスのルールや常識やマナーの方へ修正していく。

会場からの質問からＴＴの入り方について、Ｔ２はＴ１と同じであってはいけない。Ｔ２はやさしく小さな声で「あなたを助けるために来ているよ。あなたの得になるよ」というメッセージを送る。

このように、さまざまなお話をいただいた有意義な時間でした。

ことばのストレッチ体操

ー発言発語、やりとり会話ー

堀　一夫氏　　大阪府立羽曳野支援学校

堀先生の講座は、発音発語の教具の説明だけでなく、随所にグループ作りのゲームのワークもあり、参加者同士が楽しい雰囲気の中で、パワーポイントを使った資料の説明も含めて、本当に盛りだくさんの内容でした。

まず、「ことばのストレッチ体操」ということばの中には、子どものことばを「じわじわと伸ばしていく」という堀先生の思いがあることを述べられました。

そして、「しゃべるか、しゃべらないか」については、例として、風車を見せたときに、息を吹きかけたり、手で回したりしようとするのか、それとも、手で握ったり、口で噛んだりしようとするのかという違いから、その子が概念を持っているのかどうかから考察することができるというお話がありました。

また、ことばの訓練をすることにのみとらわれるのではなく、実生活に生かせる視点が大切なことや、歌や音楽や子どもの興味を取り入れていき楽しく授業を展開することのほか、一緒に遊ぶ際も後ろや横に居るだけでなく、意図的に目の前に行くことで、コミュニケーションに向かう気持ちを育てるきっかけを作ることなど、具体的な事例をまじえて、指導のベースとなるお話がありました。

ことばの学習については、日々考えさせられることが多い教育現場の中で、このことばのストレッチ体操の講座を通じて、参加者のこころのストレッチ体操になったと思います。

算数のアセスメントと支援の実際

近藤　春洋氏　　ＹＣＣ（安原こどもクリニック）こども教育研究所

支援が必要な子どもたちに適切な理解と支援がないと、その子どもたちの自己効力感が低下してしまうことが明らかになってきています。そのような状況に子どもたちを追い込まないために、なるべく早く子どもたちの状況を把握すべきであるという話から研修が始まりました。授業のユニバーサルデザイン化という取り組みが進められていますが、何もかも全てをユニバーサルデザイン化することは難しいのも現実です。そこで、アセスメントに基づく個別支援を行い、弱いところをカバーする方法について、クリニックで開発された教育支援ソフトを紹介しながら、たくさんの提言をしてくださいました。

脳科学の発達により、脳の頭頂葉の部分がさまざまな数的能力において重要な役割を果たしていることが、今日では明らかになっています。また、この神経回路は、空間認知の領域にも影響を及ぼすこともわかってきています。そこで、数への本質的な理解が進むように、数と空間を結びつけた指導法について、クリニックでの実践を紹介しながら、説明をしてくださいました。

スモールステップと間髪を容れずにすぐほめていくことで、小さな成功体験を繰り返して徐々に学習を進めていく取り組みは、学校での日々の実践にも応用できることがたくさんちりばめられていて、たいへん参考になりました。